熱帯夜の太公望

うずまさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
熱帯夜の太公望

【Ｎコード】
Ｎ０２７７Ｒ

【作者名】
うずまさ

【あらすじ】
太公望と再会を果たした熱帯夜。今回釣り上げられたのは――俺？

（前書き）

前に投稿した短編『夜の太公望』の続編です。お暇でしたら、そっちを先に読まれると混乱が少ないと思います。

コンビニから一歩出た瞬間、顔に生温い風を浴びた。
真夏特有の湿気と熱を孕んだ夜気だった。普段なら大して気にならないが、冷房がよく効いた場所に長居していたせいか、べたっとした不快感が肌にまとわりつくようで気が滅入る。
そういえば、『今晩は熱帯夜になる』と夕方の天気予報で例の気象予報士が言っていた気がする。当たりそうだな、と思いながら、俺はつい夜空を見上げた。
濃紺の片隅に今宵の月――半月だった――が煌々と浮かんでいる。
その美しさは俺に、数ヶ月前の夜をまざまざと思い出させた。
『満月になる』と予報されていた筈の闇夜。俺の家の屋根の上で、釣竿を握る女の子と出逢った事だ。
月光を飲み込んだ『魚』を釣り上げるというファンタジーそのものの体験をしたのも同じ夜だ。
――多分これから先、俺の人生であれほど胸がどきどきする事なんて無いだろう。
そんな事を考えながら、コーラと漫画雑誌の入ったレジ袋を提げて、自宅までの道のりをだらだらと歩いていた。
明るい月光が道路を照らしているので歩きやすいが――ひたすら暑い。蒸らすような熱気がひと足毎に地面から立ち上る。アスファルトによって吸収された炎昼の熱が、今になって放出されているのだろうか。早く帰ってクーラーの前で涼みたいが、歩調を早めると余計暑くなりそうだ。
身体中に汗をじっとりと掻きながらも我慢して歩き、丁度自宅とコンビニの中間地点――天地を真っ二つにするほどバカげて高層かつ、高級マンション前に差し掛かった時だ。
何の前触れもなくシャツの襟が、くんっと引っ張られた。
なんだ？　と思う間もなかった。その瞬間、俺は物凄い勢いをつ

けて夏の夜空を舞い上がったのだ！
「〜〜〜っ？！！」
襟ごと身体を引っ張り上げられ、命の危険を感じるレベルで首が絞まる。時間にして僅か五秒ほどだろうが、それでも失神しなかった自分を誉めてやりたい。
襟が引かれたのが突然だったなら、呼吸が楽になったのも同じく突然だった。いつの間にか俺は、硬いコンクリートに大の字になって、星の瞬く空を見ていた。ゆっくりと胸に手を置けば、心臓は元気に早鐘を打っている。早速、人生二度目の激しい動悸に襲われてしまった。
「……死、ぬかと、思った……」
「ごめんっ！」
誰かが、仰向けになった俺に覆い被さるように覗き込んできた。
「ちょっと長く糸を垂らしすぎちゃったみたい。怪我はない？」
「――お前……！」
月明かりのお陰で今夜はその顔がよく見えた。
夜の闇を写し取ったような烏羽の長髪に、黒目がちの大きな瞳、しなやかな肢体。履いているのは残念ながら膝丈のデニムパンツだったが、間違いない――あの夜に出逢った女の子だ。その脇にはちゃんと、例の釣竿もある。
「んー？　……あなた、どっかで……」
心配そうに俺を見ていた女の子がふと眉を寄せたと思えば、次の瞬間にはぽんっと閃いたように手を叩いた。
「あ！　あなた、この前の男の子ね！」
「おう……」
向こうも俺を覚えていたらしい。たったそれだけの事なのに何故か、笑い出したくなるほど嬉しかった。
女の子は俺に手を差し伸べて言った。
「あなた見た目より丈夫なのね。普通の人なら気絶しちゃうとこだわ」

「俺も驚いてる」
その手を借りて起き上がる。周りを見渡すと、転落防止のフェンスに囲われている他は、目の前の景色を遮る建物も無い。なんだかやけに空が近く感じる。地上から随分高い場所にいるようだが、一体ここはどこなんだ。
「ホントにごめんなさいね。思いっきり釣り上げちゃって」
女の子はもう一度謝った。やはりあの釣竿の、見えない糸に付けられた釣り針にかかってしまったのか。この間の魚か俺は。
「んな事はどうでも良……くねぇけど、ここどこだ？」
「なんとかってマンションの屋上」
「マンション？　あ～……」
この近辺にここまで大きなマンションなど、先程俺が通りかかったあそこしかない。なんとなく予想していたが、まさか的中するとは思わなかった。
「どうやってここまで来たんだよ、お前。ここすげぇセキュリティだぞ」
「さぁ？」
言いながら片手に釣竿を掴み、女の子は転落防止フェンスに足をかけた。空いているもう一方の手を使って器用によじ登る。俺達の会話は至って普通のテンションなのに、この状況は不自然極まりない。
だが前にも思ったが、もうどうでも良い。彼女は二階のある民家の屋根から飛び降りても平気だったようだから、落ちても大丈夫だろう。自分がよじ登るのは御免こうむるが。
「よっ」
フェンスの向こう、立つのがやっとといった幅しかない縁へ身軽に降り立った女の子。この蒸し暑い中で汗ひとつ流していない。縁に座り込み、釣竿を構えている姿を俺は目で追う。
「今日は何が釣れそうなんだ？」
「さぁね」

「大物狙いか？」
「んー。前みたいなのは難しいかもね」
女の子はじっと月を見上げた。俺もそれに倣う。確かに月光は飲み込まれてはおらず、目映く降り注いでいた。
月は、先ほど見た時よりも、随分高い位置にかかっていた。
「なぁ。俺、家に帰りたいんだ」
「あらそう。またどこかで逢えるといいわね」
「いや違くて……下に降ろしてくれよ」
誰がこんな場所まで俺を釣り上げたと思っているんだ。
「そこにドアがあったわよ」
「大概施錠されてるってこんなとこ。セキュリティ万全だし」
「それもそうね――あ！」
暫し考え込むような顔を見せた女の子だったが、ふいに両手をはね上げる。
俺には見えない釣糸の先に、案の定真っ黒な『魚』が跳ねていた。
今回は随分小さかったが、それでも一抱えはあるだろうか。なんだかカクレクマノミに似た魚だった。
「良かったー。今日はボウズかと焦っちゃったわ」
女の子は獲物を手繰りよせると嬉しそうに笑う。
「……なんだそれ」
「熱帯夜に釣れたから熱帯魚でいいんじゃない？」
「……」
やはり理解が出来ない。まぁ、魚がこんな場所で釣れる事が既に常識から外れている訳だから、深くは追及しない。そんな事より俺を地上に戻す件はどうなった。
「まぁまぁ、そんな顔しないでよ。ちゃんとあなたの心配事も考えてるから」
女の子は熱帯魚とやらから釣り針を外したと思えば、今度は尻尾にあたる部分に何かを巻き付ける仕種をした。俺にはそれが何だか識別出来ないから、あの釣糸だろうと見当付ける。

「でーきたっ」
見守っている内にフェンスの向こうから明るい声が聞こえた。そして立ち上がった女の子は俺を振り返って手招きする。
「じゃ、こっち来て」
「はい？！」
今なんつった？！
「帰りたくないの？　早くこっち来て」
「……そっち行かねぇと帰れねぇ？」
「うん」
「……はぁ」
覚悟の決め時のようだ。にっこり笑顔の女の子を前に情けないが、俺は震える足をフェンスに乗せる。
なるべく下を見ないよう細心の注意を払いながら、この上なく慎重にフェンスを伝い上った。
女の子はそんな俺を、笑ったりしなかった。
「根性見せたじゃない？」
誉められているのか、はたまた皮肉か。なんでもいいが、とにかく俺は女の子の隣に立つ事が出来た。
まるで磁石にでもなったように、背中をフェンスに貼り付けているという情けない格好を晒していても、地上から遥かな高みに立っていたのだ。
嫌な汗をダラダラ流しているからか、不思議なほど夜風が心地よい。不快に思っていたはずなのに。
「……あと三十秒したら多分失神する、俺」
「わぁそれは大変。さ、手を出して」
「手……？」
女の子が出し抜けに、俺の右手を掴む。そして、飛び降りた。
高層マンションの屋上から。なんの躊躇いもなく。
万有引力の法則には逆らえない。ジェットコースターもかくやのスピードで、まっ逆さまだ。死因が不可解な転落死だなんてワイド

ショー向きだ。
「しっかり握ってて！」
急降下の最中、女の子の声を拾った。今度こそマジの失神を体験しようかという俺の手は女の子の柔らかなそれに、言葉通りしっかりと握られていた。
最期にこの子に触れられたなら、死んだって構わな……い訳ねぇな、と考えた。
――そう。考える時間があったのだ。
「え――？」
気付いてみれば、俺達は空中に浮かんでいた。
「……！」
人間型のアドバルーンにでもなったように、ぽっかりと空中に漂っている。
女の子は意外に筋力があるようで、俺が腕にぶら下がっていても平然としている。反対側の腕を、真っ直ぐ天に掲げていた。
俺達は熱帯夜の風に乗って、ゆっくりと下降していく。
メリーなんとかというベビーシッターみたいだ。
脳が付いていかないのか、俺はそんな場違いな感想を抱く。
次いで、それじゃあ、この女の子も魔法使いなのかな……などと考えてしまうあたり、脳みそがますますどうかしているのかもしれない。

やがて俺達は無事に地上へ降り立った。『飛び降り自殺したカップル』と報道される危機は免れたらしい。
「えーっと。とりあえず、ありがとな」
「どういたしまして」
無造作に言いながら、女の子は手首をいじる。何かをほどくような仕種だ。その脇にぶら下がる黒い魚と、それに結ばれた見えない糸。
思い当たって、つい訊いてみた。

「もしかして、それで浮いたのか？」
俺が『それ』と指した魚を見て、女の子はひとつ頷いた。
「この熱帯魚は体内に熱を孕んでるの。あなた軽かったから、少しなら浮く事が出来たってわけ。熱気球みたいなものね」
「……俺の知ってる熱気球の仕組みとは違うと思うんだけど」
「そうかしら」
「……」
なんにせよ、女の子の収穫に助けられた事には感謝しておこう。
まぁ、感謝したところで……。
「また魚河岸に行くんだろ？」
その魚持って。
「ええ。もう行くわ」
「そっか……じゃあ、な」
「うん――またね」
そして俺達はお互いに、さよならと手を振った。
女の子の姿は瞬きの後には消えていたが、俺はもう驚かなかった。
前回と今回の出逢いで、一生分の驚きを体験したからだ。
『またどこかで逢えるといいわね』
女の子の言葉を思い出す。
また逢えるのかは当然わからない。もしも再び出逢えたら、その時は一生分どころか来世の分までも驚かされるのだろうか。
「逢えるといいわねって言われてもなぁ……。いつもいつもこんなんじゃ、心臓に悪いっての……あ」
そういえば、コーラや漫画を入れたレジ袋を、マンションのてっぺんに置いてきてしまった。
明日にでも管理人あたりに拾われるかもしれない……せっかく買ったのに。
それもこれもみんな、夜釣りの似合うあの太公望のおかげだ。
「次に逢った時は、覚えてろよ――」
自然、口をついて出たその言葉に、俺は思わず笑ってしまった。

（後書き）

前回と雰囲気が変わってしまったなと思います。苦しいネタですみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0277r/

熱帯夜の太公望

2011年3月19日23時55分発行